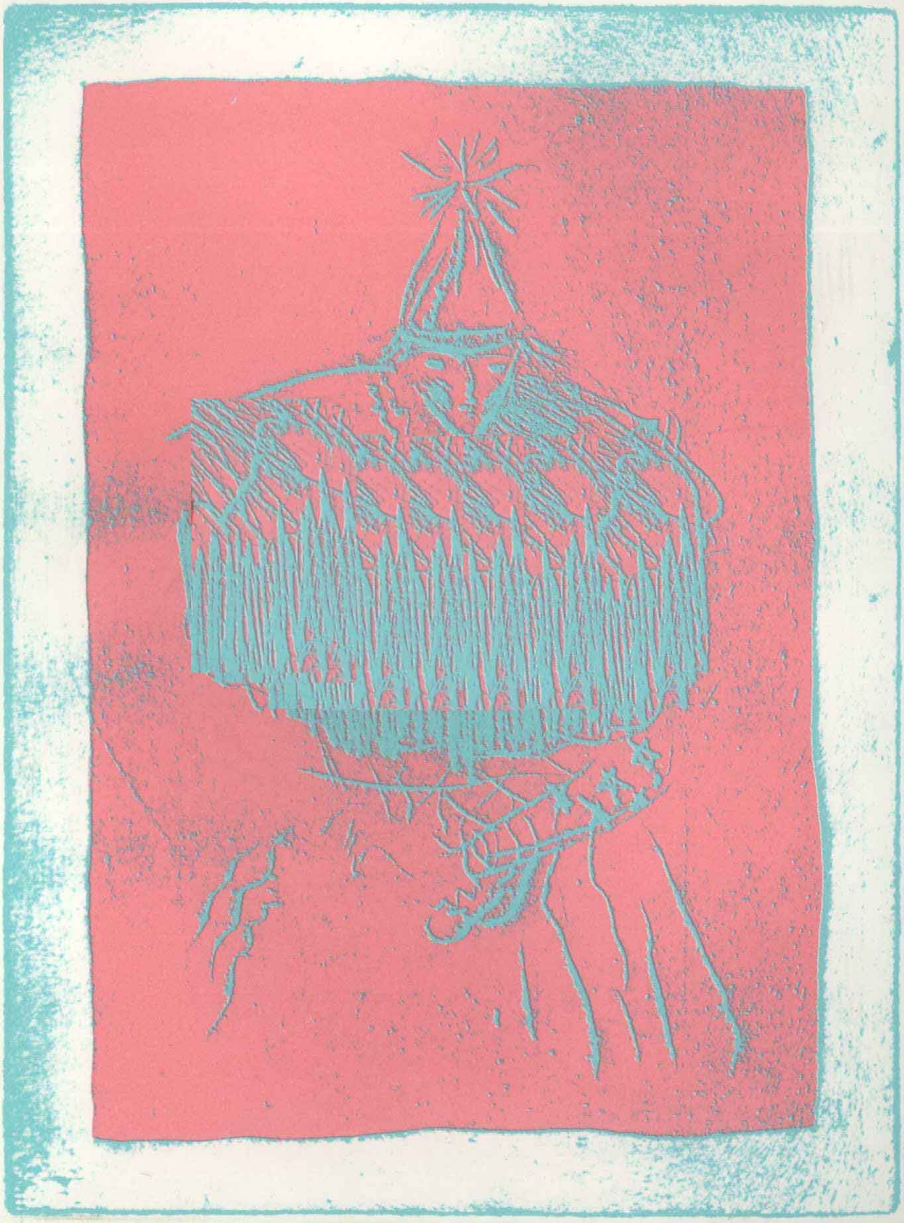
青いサーカステントの夜

楠田枝里子

新潮社版

走ハサーカステントの夜

新潮社版



青(あお)いサーカステントの夜(よる)

著者／楠田枝里子(くすだえりこ)

■

印刷／昭和60年10月15日
発行／昭和60年10月20日
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社
〒162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808
tel.／業務部 03(266)5111・編集部 03(266)5411

■

印刷所／大日本印刷株式会社
製本所／大口製本株式会社

■

定価／980円
© Eriko Kusuda, Printed in Japan. 1985
ISBN4-10-360001-2 C0090
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

◆目　次◆

墜落した少年　5
青いサーカステントの夜　45
時計売り男とネズミ捕り男　85
絵本の国の蒸留酒　109
観覧車は時代をめぐる　131
幸運な旅人——あとがきにかえて　165

装帧·插画　司　修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青いサーカステントの夜

墜落した少年

暑い夏が続いていた。

ぶ厚い城壁に囲まれた町ニュールンベルクはとりわけで、赤茶の巨大な煉瓦を型取りしたようなカイザーブルク城にも、シェーネンブルンネン（美しの泉）の金色の噴水にも、操り道化人形や木馬や赤頭巾がガラス窓の向こうから道行く人を眺めている玩具博物館にも、じっとりと熱が染み込み、黒ずんだ壁に阻まれ、抜け出られないでいる。片端には、いつまでも吹き抜けられぬコロイドの風がたゆたっている。

中央駅正面に立ちはだかった壁の内側に吸い込まれ、私がケーニッヒ・シュトラッセ（王様通り）を北にのぼっていくと、ペパーミントに染められたかなたの尖塔から、軽やかな音が流れてきた。

「ザンクトロレンツ教会だ」

近づくと、音は古びたゴシックの教会の薔薇窓あたりでいったん渦を巻き、そこから四散するように聞こえてくる。

私と同じように、ひとり、またひとりと音に引き寄せられ、集まってきている。教会前の広場に、大きな人の輪ができていた。

みっつ、よっつの幼な児が、ヒゲのお父さんの肩車に乗って、輪の中心を見つめている。メキシコ帽をかぶったジーンズの女学生も、水色のスリップドレスの少女も、カメラを二台も首からぶらさげた親父さんも、感心したように、中央の四人の若者の手さばきを眺めているのである。

手にしたバチが、大小四種類の木琴の上を、手品のように踊りまわる。音は、汗ばんだ空気の階段を跳ね下り飛び上がり、細く鋭く響き渡ったかと思うと、次の瞬間には、ほんわり耳もとをなでてゆくのだ。とりわけ、荒削りの木切れを組んでこしらえた、三メートルほどもある木琴を、三人がかりで、特大の擂粉木(すりこぎ)みたいなバチで叩いたときには、なんともなつかしい、まろやかな音が、あたりを包みこんだ。

若者たちのいでたちも、ランニングにショートパンツ、チェックのシャツにジーパンといったふうだが、それでも吹き出す汗で金髪が濡れた栗色になって、頭にへばりついている。

そして、こんな格好にどう取り合わせているのか、古ぼけた黒のシルクハットが、石畳の上にあおむけに置かれていた。中には、僅かに二枚ほどの紙幣と、硬貨が数枚。私も五マルク硬貨を取り出して、帽子の中に投げ入れた。

このとき若者たちが、ダンケ（ありがとう）と言うほか、行きずりの観客に何も話しかけようとしないのは、演奏に夢中なばかりではなく、どうやらドイツ語をさほど話せないからし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い。というのは、木琴の足に立てかけてあるボール紙には、彼らがブダペストから来たグループであることが記されているからだ。夏休みを利用して、ハンガリーの学生たちが辻音楽師として稼ぎながら、ドイツを旅しているのだろう。

いや、彼らだけではない。この広場に今集まっている人々は、ほとんどが観光客だ。ミュンヘンやハンブルク、ベルリンから。あるいはフランス、スペイン、アメリカからも、大勢の人々がやってきて、いっとき場を共有し、やがて故郷の町に帰っていく。

けれども、十九世紀の初頭、この町に忽然と現われた、あの謎の少年だけは、生まれ出た町も、一切の縁故も、帰るべき安らぎの地も、知ることがなかったのだ。

私はザンクトロレンツ教会を過ぎて西におれ、やたらに騎兵隊の人形ばかりが目につく壊れかけた骨董屋を覗き、ハラー門からノイトールへ、城壁沿いの道をゆっくりと上っていった。壁の内側から緑の枝々が、襲いかかるように乗り越えてきている。このあたりで、少年は発見されたはずだ。

一八二八年初夏。獣のように粗野な眼差の少年だったという。身長は一四四センチくらい、年齢は十六、七歳と推定された。

赤い革の縁取りのフェルト帽をかぶり、黒い絹のネッカチーフを首に巻き、細い縞織りのチョッキにグレイの上着をはおっていた。上着は、もともとフロックコートであったらしきものを、素人が作り直したようなあとがみえる。さらに、シャツが着古したボロだったのに対し、グレイのズボンの方はかなり上質の生地だったそうで、全体としてはバランスを欠いた格好だ

ったにちがいない。寸法の合っていないブーツに詰め込まれた足は、血豆や傷だらけだった。
靴のせいばかりでなく、少年はひどくぎこちなく、よろめくようにしか前へ進めなかった。まるで歩き方を習ったばかりの幼児のように。足そのものが、変形していたのだ。膝の関節が未発達で、膝小僧も引っこんでいる。すわるときは、背に直角に、太腿から踵までをぺたんと真っ直ぐに伸ばすのだった。立って歩く機会もなく、彼はその坐ったままの姿勢を強要されて育ったにちがいないと、考えられた。
所持していたものといえば、K・Hと赤でイニシャルの入った、白と赤のチェックのハンカチ、砂金の吸取紙、青い布きれ、ロザリオなどであった。左手に握りしめ、さしだした手紙は、騎兵師団第六連隊第四大隊大尉あてのもので、この子を軍人に育ててやってほしい旨が書かれていた。
少年は、話すことも読むことも書くことも、できなかった。その口からは、
「私はお父さんのような騎兵になりたい」
「知らない」
とどうにか聞きとれる言葉が出はしたが、ただ叩きこまれた音を繰り返しているに過ぎなかった。ペンを握らせれば、「カスパー・ハウザー」と紙に名のみを書きつけたが、これも訳も知らず教えこまれたままに手を動かしただけで、話すこと書くこととは本質的に違っている。
体格はがっしりしていたが、薄茶の髪は丸くカールし、手足は華奢で、皮膚も柔らかく、きれいだった。

興味深いのは、腕に種痘の跡が認められたことである。当時は、身分の高い王侯貴族しか、種痘を受けなかったからだ。

少年は、ニュールンベルクの子、カスパー・ハウザーと呼ばれるようになる。さまざまな調査の結果、高貴な生まれでありながら、十六年もの長きに渡り、ひとりぼっちで地下牢のようなところに監禁されていたのでは、と考えられるに至った。のちにカスパー自身が証言するように、自分以外ただのひとりの人間に会うこともなく、白い馬の玩具だけを友だちとして。

そしてある日突然に、ひとりの男が現われ、カスパーに衣服をあてがい、二、三の言葉を繰り返させ、辛うじて歩くことを教え、ニュールンベルクの町に置き去りにしたのだ。

こうしてカスパーは出現した。しかし、なぜ？　どこから？

少し歩き疲れた私は、リープフラウエン教会わきのシュミットという菓子屋に向かった。そこでドイツ最古のお菓子といわれるレープクーヘンを食べることが、土地の生ビールを飲みながらニュールンベルガーという焼きソーセージを味わうのと同様、ニュールンベルクを訪れたさいの私の決まり事となっているのだ。(忘れてならないものが、もうひとつ。ニュールンベルクに一軒だけ、バンベルク地方特産のラオホビアを飲ませる店があり、私はここにも必ず足を運んでしまう。燻製ビールとでもいおうか、煙臭い面白い味のビールである)

レープクーヘンは、シナモンの香り高い、少しやわらかめのクッキーといった趣きの、素朴なお菓子だ。童話「ヘンゼルとグレーテル」に登場するお菓子の家は、実はレープクーヘンだ

ったともいわれ、クリスマス近くになるとドイツでは、レープクーヘンで作った魔女の家が、菓子屋の店先に並ぶのである。四百年もの歴史を持っているというから、もちろんカスパーもこのお菓子を口にしたことがあっただろう。

発見された当初、カスパーはパンと水としか受け付けなかった。その他のものは、与えてもすぐに吐き出してしまう。ワインやコーヒーをほんの一滴水に混ぜただけで、カスパーは頭痛や吐き気をもよおした。ビールは二、三滴で、胃の痛みを訴えはじめ、高熱と夥しい発汗ののち、やはり激しい頭痛と吐き気に襲われた。

地下牢に閉じ込められていたとき、カスパーはパンと水しか与えられなかったため、それ以外のものには一切拒否反応を示したのだった。

昼夜の区別もない、彼自身は「オリ」と呼んだ穴の中で、眠りから覚めると傍らにいつも、一切れのパンと水差しに一杯の水のみが置いてあった。身につけていたシャツと半ズボンも、眠っているうち、知らぬまに取り替えられていた。

生きている人間は、ただの一度も見たことがなかった。友といえば、二頭の玩具の白い馬だけで、この小さな馬にリボンを結んだり、床にこすりつけて動かしたりすることで、カスパーは果てしなく長い時を過ごしたのだった。

そういえば、発見されてから二カ月近く収容されていたルーギンスランド塔の部屋に数頭の木馬があてがわれたときも、カスパーは大層満足そうにしていたという。光る硬貨、とりどりのリボンや色紙で飾って遊んだり、撫でたり、走らせたり。木馬たちも自分と同じように生き

ていると、カスパーは信じこんでいた。食事をとるときは必ず、木馬の口にも、パンをひとかけ、水をひとさじ与えてからだった。木馬が何かの拍子に倒れたりすると、怪我でもしたのではないかと涙ぐんだ。

カスパーはその後も、生あるものと無きものとの区別をなかなかつけることができなかったらしい。

庭の塑像が汚れているのを見て、どうして自分で体を洗わないのだろうと腹を立てたり、おりからの風に吹き飛ばされた紙片をさして、紙が自分の意志で机から逃げてゆくと考えた。転がったボールも、草臥(くたび)れたら止まるのだった。

特に、教会の表に掲げられた大きな十字架を目のあたりにしたとき、カスパーは恐怖に打ち拉(ひし)がれた。生身の人間が手足を釘付けされ、苦痛に顔を歪(ゆが)ませているようすが、堪えられなかったのだ。

カスパーは、生まれたての赤ん坊のように、無邪気で、無知で、かつ無力だった。

しかし一方でまた、不思議な能力を彼は身につけていた。

たとえば、長いこと光の射さぬ地下牢で暮らしていたためか、カスパーは暗闇の中でも物を見ることができた。むしろ、光溢れる日中より、薄暗がりの内での方が見やすかったようだ。夜の闇の中で、彼は正しく青と緑を判別さえした。

磁石や金属に対する反応も鋭く、少し近づいただけで金属の種類を言い当てたり、時に寒けや引っぱられる感覚を訴えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com